“コリアン”ディアスポラとコスモポリタニズムの民流学

全京秀　CHUN Kyung-soo
ソウル大学 *Seoul National University*

1．序言　コスモポリタニズムの民流学を提唱する理由

日本の佐渡で母と一緒に拉致され、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国の略称）で長期間居住してきた曽我ひとみ氏（以下敬称略）のケースは、これから展開するコスモポリタン的な現象の良い事例である。私はこの事例を国籍、民族単位、外交および軍事的側面を超越した21世紀のグローバル時代の希望的な現象であると評価したい。この評価は、曽我ひとみがこれまでに経験してきた日常生活そのものに対するものではない。彼女と似通った境遇にある人々が地球全体のレベルにおいて増加しつつある現時点を眺めながら、そのような現象を理解するための観点と認識の枠組みとして、コスモポリタニズム（Cosmopolitanism, Hannerz 1996：103-104）を考えている。

コリアンディアスポラというテーマのもとで、コスモポリタニズムを説明するために曽我ひとみの事例に言及する理由は、この事例がコリアンディアスポラの一つの陰影だからである。曽我ひとみ（45歳）は、北朝鮮に拉致された日本国籍所有者であると同時に、北朝鮮籍も持っている。彼女の夫であるチャールズ・ジェンキンス(64歳)は、冷戦時代の遺産である朝鮮半島の分断過程で、軍律に反して北朝鮮へ脱走したアメリカ兵出身として北朝鮮籍を所有している。彼と曽我ひとみの婚姻によって生まれた美花とブリンダは、北朝鮮で成長し、北朝鮮籍を持つ少女である。現段階においてこの家庭の言語環境は、朝鮮語と英語が主であり、曽我ひとみを中心とした日本的な一面も日常生活に見受けられることが予想される。この家族の事例をコリアンディアスポラに含めるべきか否かの判定が必要なのではなく、この事例が、現在我々が生きているグローバル時代に厳然と存在する「生」の側面であることを、コリアンディアスポラの延長線上で理解しようとする努力が必要なのである。

北朝鮮の憲法によると、この家族はジェンキンスの家族と呼ばれるべきである。平壌からすると、1年9ヵ月間、実家の日本に旅行に出たジェンキンスの妻である曽我ひとみが平壌に戻らないということは、「家出した妻」と判

定するしかない。しかしながら、父系血統を家族法の骨幹として維持している北朝鮮人民としてのジェンキンスの家族が、非単系的な血統の伝統に立脚した日本民法に基づき、曽我ひとみの家族として認識されることになった。娘たちに日本国民のパスポートが発行されたことは、コスモポリタン的な現象の中で、家族の血統論も状況によっては変化せざるを得ない、ということを指摘するに値する。曽我ひとみの家族の一員となった脱走兵のジェンキンスに適用されるべきアメリカの軍法は、コスモポリタニズムのグローバル時代に、政治的判断という口実のもと、厳格な適用の基準と方向を失っている。

私は、曽我ひとみの事例は、コリアンディアスポラの範疇の中で考慮されるべきだと思っている。この家族が日本に入国する際、朝総連（在日本朝鮮人総連合会の略称）が介入したのではないかとか、彼らが胸に「金日成バッジ」を着用していたかどうか、というような問題は重要ではない。「コリアン」という範疇が事実上、曖昧になる時代が到来しつつあるというのが一つの現実である。たとえ、その範疇を規定したとしても、実際に適用するのは難しいというのもまたグローバル時代の現実である。その背景には、ダイナミックな人々の流れ（民流）が考えられる。それによって創られた現象を理解するための観点として、コスモポリタニズムに言及する。「ディアスポラ」の範疇も多様である。原因と過程も多様で、そのような現象が発生した後に展開される人々の流れも非常に動態的である。短期間の旅行に類似した「ディアスポラ」もあれば、「脱北者」として中国大陸を転々とする人々、同じ脱北者でも韓国に定着した人々もいる。また少数ではあるが、北朝鮮に再入国する場合もみられ、このように多様な人の流れに対応できる認識の枠組みがコスモポリタニズムであると言える。

曽我ひとみと類似した境遇にある人々は、予想以上に多いと思われる。さらに曽我ひとみと夫のジェンキンスは四半世紀以上、北朝鮮籍を有しながら生活してきており、彼らの子供も北朝鮮の人民として出生、教育をうけてきたことは誰も否定できない現実である。私はこのような曽我ひとみの事例を、コリアンディアスポラの範疇で考慮すべきであると考え、その背景としてコスモポリタニズムの民流学という枠組みを提案する。

民族や国民を規定してきた古典的な範疇としての血縁、言語などは、明らかな境界を要求する属性を持っており、そのようなディアスポラ議論からは一定の距離を保つ必要がある。それができてはじめて、グローバルな時代における民の流れに対する正確な意味を把握できるようになる。電波に乗って情報が流れるように、また貿易路を通じて品物が流れるように、人々も流れる。その流れを遮ってきた近代国家の意味は、新しく規定される運命にあり、その現れであるヨーロッパ連合のような現象は、ますます拡大すると展望さ

れる。

2．民流学と海外コリアン

東ドイツ住民のハンガリー行きから始まった「ユーロピクニック」、そしてこれを基盤としたベルリンの壁の崩壊は、民流の力が動く方向を証言してくれる。民流を抑圧する政治的障害に対する抵抗は、記憶の片鱗としてのみ残るのではなく、生きている歴史の現場を形作っていく。記憶は学習される。学習された記憶は行動に転移する。人類の歴史は、民流の歴史によって記憶され、記録される。そしてこのような視点は、ある集団（時間的/空間的に固定された）の民俗誌を作成するのと同じ方法で、海外コリアンに関する資料を収集し、報告書および論文を作成することに、明らかな限界があることを教えてくれる。これは私の個人的な能力の問題だけでなく、今までこのようなテーマを扱ってきた研究者の視覚に内在する共通の問題である。

現在、ヨーロッパ連合に散在している海外コリアンのはじまりは海外就業であった。派独鉱夫と派独看護員という名の下でスタートした海外就業から、不法滞在、脱出などの要因も相まって現在に至っている。中近東とアフリカでも同じようなケースが少なくない。いずれにせよ、家族周期というダイナミックで自然な現象によって続いてきた就業と定着の過程で生まれた子供たちは、堅く守られてきた国家と民族の境界を崩しつつある。韓国経済の世界化に伴う、海外就業はトランスナショナリズムを志向している。企業はトランスナショナリズムという枠組みの中で存在するしかないが、人々は「ネーション」を「トランス」する現象を越えて、コスモポリタン的にな動きを見せている。このような民流現象を直視しながら、「コリアンディアスポラ」に関する既存の研究を簡潔にレビューしてみよう。

アメリカを中心とした北米に散在している海外コリアンに対する研究観点は、アメリカの人類学を含めた社会科学が生産してきた理論を試験的に適用してきた。メルティングポット（melting-pot）論の限界を指摘した中間少数層（middle-man minority）論を経て、最近の種族性（ethnicity）論に至る理論的枠組みの変化に、海外コリアンを資料として適用した研究が積み重ねられてきた。「高麗人」が存在している旧ソ連と、東北三省に「朝鮮族」が集居している中国では、それぞれethnografiaと民族学の研究対象として海外コリアンに関する研究が集積されてきた。ここでの研究の限界は、主流民族に対する少数民族としてアプローチすることによる、内部植民地主義（internal colonialism）が基盤になっている点にある。このような研究は、その大部分が年代記的なアプローチおよび人口学的分布と静態的な民俗誌的

アプローチであると評価できる。

北米と旧共産圏で試みられた海外コリアン研究に共通した問題点は、彼らが主流社会の一員として登場する原因と過程に介入した国際政治的／イデオロギー的側面と民族の問題が重なっている現象を見過ごした、あるいは軽視した点にある。すなわち、朝鮮半島の政治的問題と関連のある海外コリアンの発生と社会的現象に対するダイナミックな政治歴史的研究が相対的に軽視されてきたのである。

日本に居住している「在日」に関する研究は、その集団の出発点における特異性によって早くから日本人研究者の注目を浴びてきており、多くの研究が蓄積されている。日本人研究者の研究傾向は、概ね二つに両極化したものであるといえる。一つは人類学者を中心にスタートした研究傾向である。この研究は泉靖一に始まり現在も継続されており、詳細な民俗誌の作成に重点をおいている（原尻英樹、高鮮輝などの研究）。もう一つは、在日朝鮮人の研究者を中心とする、主流社会から受けてきた歴史的被害や南北間のイデオロギー的対立と民族統一の問題を結びつけた研究で、主に時事的内容を扱っている。政治学と社会学分野による在日朝鮮人または在日同胞に関する研究は、朝鮮半島の分断と南北間の葛藤を中心とした、政治的システム研究に偏っており、文化的イデオロギーに関する視点からは乖離する傾向も少なくない。このような問題点を提起し、国際政治的な現象として在日朝鮮人を分析したRyang（1997）は、両極化した在日朝鮮人の観点を統合しようと試みた。

Ryangの研究は、華僑とユダヤ人を中心に展開されてきたディアスポラ論が海外コリアンを研究する枠組みとして定着する契機となった。ディアスポラ論を用いて海外コリアンの特殊性を浮き彫りにしたのである。言い換えれば、ディアスポラ論を海外コリアンに応用することによって、国際政治的／イデオロギー的な政治歴史的ダイナミックスを備えることができるという点を発展させれば、海外コリアンに関する研究がディアスポラ論の一般化に寄与することができる。このような希望をもって、私はディアスポラ論を「民流学」と翻訳する。そして、民族、戦争、国家、イデオロギーなどをキーワードにした民族集団の移住現象に関する多くの事例研究が今後行われるであろうことを予測し、ディアスポラ現象に対する学際的なアプローチとしての民流学を提唱する。

グローバル時代の普遍的なイデオロギーとして定着してきたコスモポリタニズムは、これからコリアンディアスポラを観望する認識の枠組みとなりうる。すでに今まで我々は、華人とユダヤ人、そしてインド人のコスモポリタン的な民流現象に対して多くの知識を蓄積してきた。グローバル時代にコス

モポリタニズムに基づいてコリアンディアスポラを考察するということは、コリアンディアスポラを特殊性の次元で検討することに対する問題意識の発露でもある。コリアンディアスポラというジャンルが抱えている普遍性を発見及び構築することで、未来を予測するビジョンを提供することができるであろう。このような研究方向を遮ってきたのは、「朝鮮半島の政治軍事的分断」である。冷戦の産物である分断は、コスモポリタニズムが追求している社会的現象とは逆方向を志向してきており、これが海外コリアンの「生」を規定してきた特殊性であるといえる。

3．分断からコスモポリタニズムへ

1）北朝鮮主導の海外コリアンの分断化

「コリアン」を議論する際に、テーマとは関係なく「分断」という単語が登場したら、ほとんど自動的に「統一」という単語が後に続くケースが珍しくない。「分断」と「統一」という構図、それに関する認識は、極めて単純で、非常に危険な思考方式であると私は考えている。分断でなければ統一、つまり白黒論理の極端な現象が朝鮮半島に投影されているかぎり、我々は「生」の真実から目をそらしてしまう危険性から逃れることはできない。つまり、分断と統一という構図は、理想的な言語的遊びに過ぎず、現実的な生の構図が非常に複雑であるということを無視してしまう危険性を内包している。海外コリアンはこのような問題を身近に体験しており、彼らの立場で「第三の道」に対する選択を考えることを可能にするのがコスモポリタニズムである。

本稿では、ディアスポラという現象と、朝鮮半島の分断という政治歴史的ダイナミックスの過程の中で繰り広げられる「生の具体的な事例」を中心に議論を展開する。つまり、分断という枠組みがコリアンディアスポラにどのように刻印されているかを叙述することが、本稿の主軸を成している。海外コリアンの「生」からすると、分断の次の段階は統一ではなく、コスモポリタニズムがその代案であることを浮き彫りにする民俗誌的事例を紹介したい。

【事例１】

1987年11月初旬の土曜日の深夜、私はペルーのリマ空港に着いた。翌日の日曜日の朝、何回か韓国大使館に電話をかけたが、全く応答がない。ホテルの電話帳から「KIM」という名字をいくつか確認し、その中でもゴシッ

ク体で印刷された「KIM Chang Shik」に電話をかけた。電話を受けたのは声から判断すると年輩の女性だった。暫くして、自らをキム・チャンシクであるという人が電話に出た。私の身分とリマ訪問の目的を詳細に説明した。すると、彼は、「南朝鮮大使館には連絡したのですか」と応答した。その瞬間、私の背中に冷や汗が流れるのを感じた。息が詰まるような瞬間であった。すでに私の身分を明らかにした後である。無理に声を落ち着かせて「そちらは応答がない」と説明するやいなや、「それでは、きょう私が先生のためにリマを案内してあげましょう」と提案してきた。私は「大丈夫だ」と適当にはぐらかして電話を切った。冷や汗を拭くためにシャワーをしなければならなかった。月曜日、韓国大使館の関係者にその話を伝えたら、「キム・チャンシクと通話したんですか」とびっくり仰天した反応をしめした。彼は中南米の北朝鮮の総責任者で、当時は大使館（北朝鮮）を対外連絡事務所レベルに縮小した状況であった。リマには50人余りの韓国のパスポート所持者が居住していたが、特にキム・チャンシクの存在にはかなりの神経をとがらせていたようであった。

ブラジルのサンパウロでは一連の反韓国政府運動が起こったことがある。韓国政府に不満を抱いていた一部の同胞らがブラジリアの大使館に抗議訪問するなど、サンパウロの総領事館を困惑させた。その後北朝鮮の代表団がサンパウロを訪問し、ラテンアメリカのコリアンコミュニティが分裂する兆候が現れた。この背景では北朝鮮の工作が行われていたとされ、朝鮮半島の分断はチャンスさえあれば、海外コリアンのコミュニティにまで延長するということが指摘できる。

【事例２】

北朝鮮が介入したか、もしくは主導した海外コリアンのコミュニティの分断状況は冷戦時代の西洋世界で主に見受けられた。代表的なものとしては日本の朝総連と民団（在日本大韓民国民団の略称）の分断があり、類似した現象はアメリカとカナダでも展開された。北朝鮮は北米の海外コリアンに対して、故郷訪問のプログラムを利用して近づき、そのプログラムは北朝鮮出身の海外コリアンにかなりの影響をあたえた。北米をねらっていた故郷訪問プログラムが南米の海外コリアンにも影響を与え、政治的に韓国の独り舞台だったアメリカ大陸の海外コリアンの社会に、分断の兆しが見え始めたことは間違いのない事実である。

1959年に新潟港を出航して元山に向かう最初の帰郷船に始まって、20万人以上の在日コリアンが北朝鮮に送還された。北朝鮮への送還に関わった在日朝鮮人の知識人の活動に対する評価も今後の課題だが、北朝鮮へ送還され

た在日コリアンの生活と、日本に残った彼らの家族の生活についても綿密な資料収集と分析が必要である。北送コリアンの中には、後に南派工作に深く関わった者もいたことが明らかにされた。北送の在日コリアンの問題も結局、韓国と北朝鮮の間の政治的競争と陰謀工作過程で露わになった民流現象の一つである。

【事例３】

1968年、ソウルではドイツ留学生スパイ事件が公開された。優秀な学者らが拷問をうけて投獄された。この問題は現在、ソウルの疑問死真相調査委員会によって、当時ソウル大学法大の崔鐘吉教授事件にKCIAが関与していたことが証明され、最近では宋斗律博士事件に対しても韓国の司法部レベルで究明が展開された。宋斗律氏とその家族、そしてこれらと類似した事件で韓国の政府に逮捕ないし調査を受けたことのある海外コリアンの「生」に対しても、朝鮮半島の分断民俗誌というテーマを設定して慎重に扱うべき問題であると考えている。

２）韓国主導の海外コリアン分断化

ペレストロイカは旧ソ連の地図を大きく変動させたのみならず、旧共産圏に居住していた海外コリアンの「生」においても地核変動をもたらした。韓国人による海外コリアン訪問と、海外コリアンによる韓国訪問のチャンスをつかむことによって、韓国政府は工作を実行に移した。その結果、韓人協会という組織が韓国政府の主導と支援で設立され、以前から北朝鮮との緊密な癒着関係を維持してきた旧ソ連地域の海外コリアン（高麗人協会）と対決するという構図をみせるようになった。ロシアのレニングラードからサハリンに至るまで様々な地域でこのような現象が生じ、中央アジア地域でも同じような現象が展開された。

【事例４】

ウズベキスタンのキム・ビョンファコルホーズに居住しているキム・バレリは、ペレストロイカ以前の旧ソ連時代に、北朝鮮の招請で二度にわたって平壌と金剛山を訪問したことがある。そのたびに彼の一行は、金日成主席と一緒に写真をとった。ペレストロイカは北朝鮮が堅く築いてきた海外コリアンコミュニティに、韓国側の工作活動が可能となるチャンスを与えた。韓人協会という組織は母国訪問団というプログラムを組み、中央アジアの海外コ

リアンに韓国訪問の機会を提供した。その結果、彼らは対等な立場と目線で北朝鮮と韓国を比較する機会を手にし、分断された祖国から離れている第三の地位に自らが置かれていることを自覚するケースもあった。

わたしが、1990年アルマアタのコクデンアジンで朴日先生に会ったとき、彼は80代半ばだった。戦後、ソ連派として平壌に登場した彼は金日成大学の副総長を歴任したが、金日成のソ連派粛清期を逃れて、アルマアタに帰郷していた。極東出身の彼は、当時の妻がロシア人であったため、間一髪で粛清を逃れることができたのだった。彼には同じ極東出身の前妻の間に息子が一人おり、彼は画家だった。朴日先生は遠東朝鮮師範大学とその大学が廃校される過程について証言できる唯一の生存者だった。その後、朴日先生は韓国政府の招請により、ソウルで公開講演をおこなう機会にも恵まれた。ところが、2000年の夏、わたしが彼を訪ねてアルマアタに行ったとき、彼は人に会うことを拒否して、自宅に閉じ込もっていた。韓国政府からの招請と、ソウルでの公開講演に不満を抱いた北朝鮮による報復と思われるテロは、彼にとって生と死の境をさまようかのごとき経験となったのだ。

【事例５】

1990年私はウズベキスタンのキム・ビョンファコルホーズで、平壌からきた貿易会社の一団と出会った。彼らが約一週間滞在することをコルホーズの委員長は私に伝え、宿をしばらく他の村に移したほうがいいのでは、という提案をしてきた。委員長の提案は、韓国人と北朝鮮人の敵対的な構図に対する憂慮から発せられたものであった。私はその提案を拒否し、予定通りキム・バレリの自宅に、平壌の人々はコルホーズのコシンシャ（ゲストハウス）に滞在することになった。社長（44歳・男性）と副社長（60歳・男性）、そして通訳（56歳・女性）の三人が到着したその日、私は彼らと挨拶をかわした。彼らの来訪目的はウズベキスタンの綿花を購入することにあった。

初対面で社長が、済州島出身の北送在日同胞であることがわかった。彼の言葉に済州島のなまりが混ざっていたからである。彼に「大阪出身ですね？」と尋ねたら、「やはり南朝鮮の教授はみなKCIA要員だ」と応じた。その日の夜、私は意図的に平壌からきた副社長と通訳に集中して酒を勧めた。二人が先に眠り込み、社長のソン・スンヨンと話をする機会を得た。彼はクラシック音楽と美術に関する該博な知識を持っていた。彼と彼の家族は平壌でアパート暮らしをしていること、北送前の日本の生活について多くの話をしてくれた。彼の兄は大阪に居住しており、ソウルの企業相手に貿易業を営んでいる。８月15日、コルホーズのマギアロブ委員長は私たちのためにパーティーを開いた。その日、我々は再び酒宴を設けたが、やはり副社長と通訳が

先に酔いつぶれてしまい、ソン社長と私が二人で会話を交わすこととなった。彼はアルミ製のかばんと手を手錠でつないだままで寝食していた。中身を尋ねてみると、「木綿購入用の７万ドルが入っている」と答えた。その日の夜、社長と私はすっかり酔っ払ってしまった。彼は酔っ払ったまま、街路樹にぶつかって顔に大怪我を負ってしまった。怪我の言い訳をどのようにしたらいいかを心配しつつ、二日後に次の目的地であるハバロフスクへ向かった。

中央アジアの高麗人と平壌からの人々は非常に親しい関係にあった。彼らのほとんどは咸鏡道を背景にした沿海州出身であり、平壌側の例年の故郷訪問プログラムに参加したことがあった。「南朝鮮」から人々が訪問する前、中央アジアは共産圏という同質性を標榜した北朝鮮の政治的独り舞台であった。ペレストロイカという新たな風が北朝鮮が独占していた舞台に、韓国人を登場させる契機となった。中央アジアの高麗人社会も朝鮮半島での南北の敵対関係を作り上げることになり、その結果、南北分断の構図が中央アジアに根を下ろすことになった。

【事例６】

エストニアのタルリンに居住している李・セルゲイの故郷はカザフスタンである。彼はレニングラード大学を卒業後、タルリンの交通関係の政府組織に就職し、そこで結婚して家族を養っている。ところが、旧ソ連からエストニアが独立したことによって、彼はカザフスタンで暮らしている両親とが国籍上引き離されてしまっただけでなく、カザフスタンの経済が厳しくなるにつれて、家族に会うことが非常に難しくなりつつある。ペレストロイカは旧ソ連の高麗人社会に、多数の離散家族を生み出す結果を招いてしまった。2002年にタルリンで彼と会ったとき、彼が両親と最後に会ってからすでに10年以上が経過しており、両親のいる故郷を訪れることをほぼ諦めた状態であった。現在、彼はユーロを使用するヨーロッパ連合の一員となり、フィンランドのヘルシンキにある韓国大使館の行事に参加している。

【事例７】

カザフスタンの東部、ウシュトベに住んでいるカルリナの妹は、グルジアのアッパシアに居住している。ソ連時代には、休暇期間中にソ連の政府が提供する交通便を利用して、ソ連領に居住している兄弟姉妹に会いに行くことが楽しみであった。しかし、資本主義の経済方式が導入されてから、家計が相対的に悪化し、兄弟姉妹間の往来も難しくなった。ビザの手続きはもちろん、経済的疲弊により飛行機のチケットを買うことすら厳しくなった。

【事例８】

幼いとき、両親と一緒にサハリンにあるウグレゴルスキ炭坑へ移住した鄭学用氏は、現在、ユジノサハリンスクで生活している。彼はいわゆる無国籍状態である。無国籍という身分を所持している朝鮮人はほぼ韓国出身者であり、現在彼らは自身の無国籍状態と戦後ソ連に抑留されたことに対する対日本請求訴訟を国際司法裁判所に申請している。旧ソ連時代にナホトカにある北朝鮮の領事館では、無国籍者を相手に宣撫工作を繰り広げたが、成功までには至らなかった。彼の弟はサハリンで生まれ、グルジアで医者として生活している。ペレストロイカの後、兄弟の国籍は分かれてしまい、韓国による海外同胞招請プログラムへの参加を通じて、ソウルでの再会を試みたが、鄭学用氏の無国籍という身分が障害となった。

【事例９】

樺太庁時代、サハリンに居住していた朝鮮人の中には、勉学のため東京にいき、その最中に徴用されて日本軍の兵士になったケースもある。日本軍の兵士として朝鮮に派兵されたものの、終戦と共にソ連軍の捕虜となり、２年間シベリアで流刑生活を送った後、日本国民として日本に帰還した李先生の場合がそれである。サハリンにいた両親や兄弟はみな、李先生が死亡したと思い込み、祭祀（法事）が行われていた。日本に居住しているサハリン出身の在日同胞の帰還運動によって、５年前から相互生存が確認されている。現在、東京に住んでいる李先生は、日本人の妻との間に一男一女をもうけたが、子供たちの将来を考え自身が朝鮮人であることを明らかにすることもできず、一人で苦悩の日々を送っている。

【事例10】

韓国政府はサハリンのロシア国籍取得者に対して、永住帰国をさせようと試みた。半世紀をさかのぼって、帝国主義との戦争によって起こった民流の流れを現状復帰させるという趣旨である。半世紀という時間の流れは、希望者の永住帰国を簡単には受け入れてくれない。また、故郷と故国に対する50年前の思い出だけでは、永住帰国という行動までには結びつかない。過去50年間にわたって築きあげた新しい「生」に引力が働くのが当然である。永住帰国と関連したホ・キョンミの詩(2000年２月25日付、「立ち去ります」)は、その背景と心境を切実に表現している。

・・・１世が切に待ち続けた帰国の日、ついにきたのだな／・・・一生

涯サハリンの恩恵を受けてきた1世のわたしも／きょうは子どもたちと再会できる日を期待しつつ／・・・／わたしはあなたたちに子孫の将来を託して立ち去ります／わからないことが多すぎて、もどかしい気持ちをおさめつつ立ち去ります／民族文化がこれからどのように、発展するのか、気に掛かります／祖国統一支持とは何だったのか／帰還促進とは、何だったのか、それらのねらいが何なのか誰も知らない／子孫たちが無事に暮らせるよう両手を合わせて祈りを捧げます／・・・／痛哭がこだまとなり、そのひびきだけを残して立ち去ります

【事例11】

韓国政府の対北工作レベルにおいて、何よりも重要な問題は、朝総連に属している在日同胞の対策であろう。対北工作に自信を得た韓国政府は、朝総連の構成員を相手に故郷訪問団を組織して、墓参りや親戚訪問などの大規模な招請プログラムを展開し、在日コリアン社会を大きく動揺させた。その過程でかなり多くの北朝鮮籍の在日コリアンが、韓国籍へと身分移動をした。

1997年、私と妻は大阪の茨木にある白龍寺という朝鮮人中心の寺が主催した小豆島88寺刹巡礼行事に参加した。20余名のメンバーはすべて在日で、壮年層の婦人らが中心となって活動していた。そのうち、若い二人の兄弟とは韓国語で対話ができた。彼らは朝鮮学校の出身で北朝鮮籍をそのまま維持しており、パチンコ部品を調達する会社に勤めていた。国籍を北朝鮮から韓国に変えなかった理由は、イデオロギーの問題ではなく、仕事が忙しすぎて時間がないためという単純なものであった。いわば、韓国の対朝総連工作、すなわち対北朝鮮工作がかなり成果を上げていたことが裏付けされたといえる。

4．結語：工作拠点論の廃案を目指して

国際政治的冷戦と朝鮮半島の分断。これを滋養分に成長してきた反共イデオロギーは、「我々」という認識の限界をコリアンディアスポラに内在する時限爆弾として我々に提供してきた。韓国の国家権力によって製造されたこの時限爆弾は、北朝鮮でもほぼ同じような製品が作られてきたと思われる。この時限爆弾がいつどこで爆発するかわからないというのが、私が育んできた人類学的観点の限界の表れであると言える。これは他者化という学問的方法論の忍耐と努力を越える問題であると思われるため、我々は再び「我々」が提供する民族主義の特殊な実体の中を泳ぎ回らねばならない状況を迎えて

いる。民族主義のグローバル化、これはコリアンディアスポラが形創った「特殊な実体」の一つである。これを複雑にした国際政治的、政治経済的過程のもつれを解くためには文学と芸術、そして感情までも総動員する必要がある。

極めて政治化された南北間の分断状況の下に発生した政治的状況が作り出すシステムによる遠隔操作を、海外コリアンコミュニティが受けていることを念頭に置いていない海外コリアン研究が成立する可能性は非常に制限される。華僑とユダヤ人の民流現象をディアスポラとして表していたことを想起しつつ、本稿はディアスポラ研究の学際的現象を考慮した民流学を提唱することに始まった。本稿のイデオロギー的側面は、局地文化（local cultures）間の競争的な脈略に安住するのではなく、局地文化から普遍的知識を創出する方法としてのコスモポリタニズム（Hannerz　1996；109）を志向している。

満州事変（1931年）から大東亜戦争の終戦（1945年）に至るいわゆる15年戦争を経て、東アジアは国際政治的激動を迎え、朝鮮半島の戦争と分断にまで行き着いた。このような悲運な過程の中で展開されてきたコリアンディアスポラは、後に長期間の冷戦によってある程度、固定したかのようにみえた。しかしながら、ペレストロイカとグラスノストというもう一つの地核変動によって表出したコリアンディアスポラの分布図自体が、一編の激動のドラマとなった。このドラマの中で演出されている角逐的な象徴をどのように説明するかが、これからの課題であろう。このような象徴の競争が、曽我ひとみの家族が繰り広げる日本版コスモポリタニズムの中で、日本の参議院選挙、アメリカ大統領選挙、そしてアメリカの対イラク戦にまで結びつく。このことを看破できなければ、今われわれが体験しているグローバル時代のコスモポリタニズムを正確に理解できないであろう。

過去60年間、海外コリアンは、韓国と北朝鮮の両政権の相互誹謗と侵略のための工作拠点としての地位に甘んじてきた。いわば、海外コリアンと彼らのコミュニティは、韓国と北朝鮮の工作拠点論的価値としてのみその存在が認められてきたといえる。民流学の条件を充分に揃えている海外コリアンの歴史と政治は、近代的な国家概念の限界を明らかにする試験場となっている。国家間の国際政治が抱えている限界を海外コリアンの生活から克明に窺うことができる。近代的な国家概念が存在するかぎり、民族国家とコスモポリタニズムとの緊張関係は避けがたい。しかし、コスモポリタニズムを志向している民流は海外コリアンのみならず、ニューヨークのマンハッタンや、香港、カリブやバルカンやバルティックでも絶えず進行形としての姿を見せている。コスモポリタニズムのイデオロギーは未来志向であるため、現在の

ような民族国家または国民国家の形態が維持されるかぎり、次のような予測が可能となる。すなわち、「コスモポリタニズムを阻害する国家からコスモポリタニズムを助長する国家」へ国家機能が変化する時代こそが、グローバル時代が真に意味するところであると考える。

熱い血と涙にまみれて前後の区別が付かないほど混沌とした状況を生み出す「我々」の中で、「我々」の他者化が要求する冷静さを与えてくれた人類学に感謝の意を表したい。客観の冷たさを冷たく、主観の熱さを熱く感じさせ、両者の間でバランスを保ちながら歩めるよう導いてくれた人類学に感謝を捧げたい。私に「我々」を体と心をもって強く感じさせてくれた多くの「我々」という人々。異文化研究を命題とする人類学によって成長した私の認識論。「我々」を他者化しようと努力してきた私のコリアンディアスポラへの激情。家族分断の状況から出発した私自身の家族歴を理解するためにも、学際的な民流学の可能性を願わずにはいられない。曽我ひとみというドラマの延長線上で、いつか自分とだぶってしまい、それを振り払うことができないというのが、今の私の立場である。いわゆる民族主義と人類学の間で繰り広げられる私の苦悩が、どのくらいバランス感覚を維持できたかどうかに対する批判に、私は甘んじなければならないであろう。

参考文献

Hannerz, Ulf 1996 *Transnational Connetions: Culture, People, Places.* London: Routledge.

（韓国語で作成された本稿は、陳大哲（中部高等学術研究所研究員）博士によって日本語に翻訳され、宮原葉子（ソウル大学人類学科修士課程）によって校正された。しかしながら原稿の内容に関する全ての責任は著者にある。）

Abstract

Cosmopolitan Aspects of the Korean Diaspora in the Global Context

There have been two extreme aspects for looking at the Korean Diaspora from ethnography to policy. If we figure out the quantity of articles and published materials, the latter ones outnumber far beyond the former. This phenomenon has been influenced

by the extremely intensive tension between the two Koreas' political propagandizing against each other. I would like to focus on the issue in this paper from the perspective of the Korean Diaspora as political victims by two Koreas during the cold war era. This political orientation inside the peninsula gives no chance to admit cosmopolitanism entailing a greater involvement with a plurality of contrasting cultures to the Koreans in and out.

While the North Korean side did successfully expand their political impact toward the oversea Korean communities especially on the Japanese-Korean and even further to Americas before the Perestroika, the South Korean side has taken over the better position to use and control the oversea Korean communities especially on the side of the old Soviet circle as well as China. In the Korean community in Japan, there has almost been revolutionary conversion in terms of nationality from the North to the South. I am not able to escape from the judgement of which this phenomenon has obviously been influenced since the Korean war by the two Korean governments against the oversea Korean communities in the world in order to take over the each other's political arena. The situation could be termed as a silent battle utilizing not the bullets but people in the field of the Korean Diaspora.

Cosmopolitanism has been a critical perspective to understand the transnational situations in terms of business as well as political sectors in the context of global networks. Diaspora as a human phenomenon connects naturally into plurality and multicultural experiences to the people in that position without doubt. Even in the intensive tension in the Korean peninsula, cosmopolitan events have also been caught up, for example, the on-going case of the Soga family including the US army deserter Mr. Jenkins clearly being tied up with Korean peninsula as well as the Korean Diaspora in another sense. It is a complex case of multicultural and multinational with various levels of emotional aspects. I would consider this Soga family case as a part of the Korean Diaspora in the context of cosmopolitanism. Otherwise, we are possibly going to be faced with losing the opportunity to understand explosively growing phenomena of diaspora in the global society.

People in the situation of diaspora have been acting as the role of frontiership for cosmopolitanism. Would it be possible for us to consider the diaspora phenomenon as human assets in the context of cosmopolitanism ? One thing for developing this idea not to forget is the perspective that "cosmopolitanism is not a way of becoming a local, but rather of stimulating local knowledge"(Hannerz's terms).